

『英語箋』の配列について

石 上 敏

一、はじめに

一八六一（万延二）文久元）年に出版された英語彙集『英語箋』についての研究は、殆んどされていない。その理由として、本書の内容が一般入門的なものであり、従って研究対象とはなりにくかったこと、本書が出版された年代は、丁度英語字が隆盛になりつつある時期であったため、本書と前後して出版された英辞書に優秀なものが少なくあったこと等が挙げられる。^(注2)

さらに、ひとつの問題点として編者石橋政方の編纂に対する姿勢を上げることができる。本稿では、『英語箋』の配列を調査することにより、その編纂態度について考察を加えてみたい。

尚、本書出版の四年前（一八五七）安政四年）に、通詞村上英俊により同名の和英辞書『英語箋』全七冊が編まれている。村上編『英語箋』は「米語箋」と副題が附され、

一八三〇（天保元）年にバタビアで刊行された『英和英語彙集』の復刻版である。石橋編『英語箋』は、この辞書とはどのような影響関係も見られないことを記しておく。^(注3)

本稿の調査には、

「英語箋」Ⅱ東北大学狩野文庫本

「改正増補英語箋」Ⅱ東北大学狩野文庫本

「英語箋」Ⅱ京都市松林氏蔵本

を用いた。

二、「改正増補英語箋」との関係

「英語箋」（以下「英」と記す）の「自叙」には、一七九八（寛政十）年に森島忠良によって編まれた日蘭語彙集「英語箋」（以下「蛭」と記す）の名が見え、これを見て天文・地理・套語などの意義分類を知ったと記されている。^(注4) ところが実際に石橋政方が底本として用いたのは、「蛭」

ではなく、それより下ること半世紀、一八四八（嘉永元）年に箕作阮甫によって大幅に改訂された『改正増補蚕語箋』（以下「改蚕」と記す）なのである。これは、「英」所収語彙のうち「蚕」には見えず「改蚕」で増補されたものが、天文七、地理三、時令一、人倫九、身体七、疾病七、官室六、服飾七、飲食七、器財二五、金四、玉石三、獸五、虫二、草一五、木八、数量一と計一一五語あること。これに對して「改蚕」には見られないが、「蚕」と「英」には共通しているという語が一例もないことより明らかである。

「蚕」「改蚕」「英」それぞれの体裁は表Ⅰに示す。巻一については表Ⅱ・Ⅲを参照（巻一はほぼ共通している）。

さて、そこで「改蚕」と「英」とを比較すると、表Ⅱのようになる。大きな特徴として、

「改蚕」での語句の配列順序を基とした場合、大きな特徴として、「英」では語句の配列の移動が非常に著しいということが挙げられる。「改蚕」と「蚕」との共通語彙数一六二〇（「英」が「改蚕」に対して増補した語句は「194・姉妹」「507・櫛」「617・羽毛」「880・尿瓶」「967・銃」「1344・十万」「1345・百万」「1349・一円」の八語しかない）、共通語彙数は「英」の総語彙数とほぼ一致する）のうち九四四語即ち約六〇%の語が形や意味はそのまま、ただ配列順序だけを変えられているのである。

さらに、語句の移動つまり「改蚕」に對しての「英」の配列換えには規則性が認められる。以下、「改蚕」から「英」への配列の変化を見ていくとともに、どのような意図で規則的な配列換えが行なわれたのか考察する。ただし、「改蚕」と「英」との共通部門（表Ⅰ参照）のうち、巻二の「会話一」「会話二」では本稿で問題とする上下二段の配列方法がとられてはおらず、さらに「改蚕」が縦書きであるのに対して「英」は横書きになっており、他の部門とは同列に考えられず、本稿の調査対象とはなり得ないと判断し、これらを除外する。

ここで問題点として、「英」で語句を削除したために配列の変化が云わば必然的に生じたのではないかという疑問が挙げられる。それに対して、配列を変えることによって引きずられるかたちで語が削除されたと考えられることもできる。このどちらが正しいのかということが問題となる。オランダ語の概念と英語の概念が必ずしも一対一の対応をとるとは限らないことや、長きに亘り洋学即ち蘭学を意味し、「英」の編まれた時期においても、英語学は蘭語学に大幅に立ち遅れていたことなどを考えると、当然削除が先であっただろうと考えられる。ところが「1804・一匁」が削除されているのにも関わらず「1805・十匁」が取られている例に顕著なように、本稿の主眼である配列換えの規則性によつ

<表1>

○巻二の体裁 (数字は所収語彙数)

蜜語箋	改正増補蜜語箋	英語箋
言語 303	言語	
	依頼名字 添字 163	依頼名字 添字 138
	自, 能, 所, 三種動字 (自, 能, 所の区別あり) 130	自, 能, 所, 三種動字 (自, 能, 所の区別なし) 116
	人品指示承接疑問 四種代名字 49	人品指示承接疑問 四種代名字 27
	處前字 81	
	接続字 17	
	嗟歎字 6	
	日用ノ語法 123	
	会話一 80	会話一 185
	会話二 62	会話二 32
万国地名箋	改正増補万国地名箋	
亜細亜之部 81	亜細亜 71	
	亜細亜諸島 45	
	地中海及諸島 15	
欧羅巴 66	欧邏巴 63	
	欧邏巴諸島 18	
亜弗利加 42	亜弗里加 36	
	亜弗利加諸島 13	
北亜墨利加 26	南北米里堅 65	
南亜墨利加 16		
	米里堅諸島 16	
	豪斯多刺里 44	
	跋	

＜表Ⅱ＞

巻1		『改竄』 語数	増補	削除	±	『英』 語数	(%)	共通 語数	順	移	移動 率(%)
1	天文	82	0	24	-24	58	70.7	58	47	11	19.0
2	地理	73	0	3	-3	70	95.9	70	9	61	87.1
3	時令	54	0	1	-1	53	98.1	53	37	16	30.2
4	人倫	176	1	24	-23	153	86.9	152	83	69	45.4
5	身体	121	0	20	-20	101	83.5	101	66	35	34.7
6	疾病	91	0	29	-29	62	68.1	62	16	46	74.2
7	宮室	86	1	9	-8	78	89.5	77	19	58	75.3
8	服飾	88	1	25	-24	64	71.6	63	23	40	63.5
9	飲食	58	0	12	-12	46	78.3	46	19	27	58.7
10	器財	298	1	58	-57	241	80.5	240	88	152	63.3
11	火器	151	1	103	-102	49	31.8	48	27	21	43.8
12	金	26	0	5	-5	21	80.8	21	12	9	42.9
13	玉石	32	1(重複)	9	-8	24	71.9	23	2	21	91.3
14	鳥	51	0	10	-10	41	80.4	41	2	39	95.1
15	獣	55	0	5	-5	50	90.9	50	25	25	50.0
16	魚介	47	0	14	-14	33	70.2	33	1	32	97.0
17	虫	30	0	6	-6	24	80.0	24	5	19	79.2
18	草	149	0	75	-75	74	49.7	74	14	60	81.1
19	木	87	0	24	-24	63	72.4	63	6	57	90.5
20	数量	50	3	8	-5	45	84.0	42	36	6	14.3
巻2											
21	添・依	163	1	26	-25	138	84.0	137	115	22	16.1
22	動字	130	1	15	-14	116	88.5	115	10	105	91.3
23	代名字	49	0	22	-22	27	55.1	27	14	13	48.1
計		2147	11	527	-516	1631	76.0	1620	676	944	58.6

(注) 21添・依は添字・依頼名字(形容詞、形容動詞・副詞)のこと。

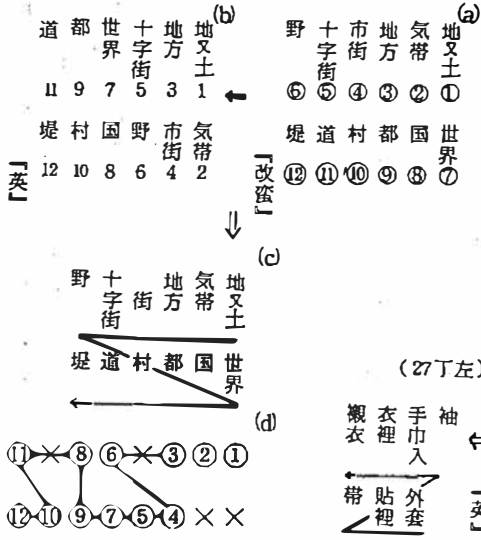
て削除が生じたと考えるほうが自然な例がいくつか見られる。削除が先か配列が先かという問題については、削除された語ひとつひとつについて検討していけばある程度は明らかになるであろうが、本稿では最初から削除された語は考慮に入れず、共通する語彙についての移動、可視的（『改蚕』と『英』とを比較することによってかたちとして見ることのできる）な類型を重視して論を進める。

三、配列の類型

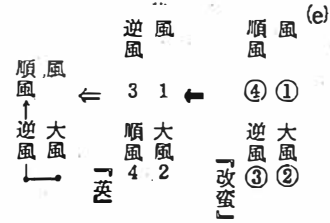
『改蚕』から『英』への配列の変化における規則性でも基本的なものは『改蚕』に収められた語句を右から左へ取っていく「横の流れ」である。『改蚕』『英』さらに「蚕」はどれも図1に示したように、右上から上下下という順序で語彙が並べられている。これは数字や曜日などの並べ方を見れば分る。共通語彙のうち五六語（三四・九%）が、『改蚕』の配列では、右隣りにあった語の次に位置している。さらに二語以上を隔てた場合の二九語（もし、いくつかの語句を飛び越えてそのままならば、間にあったものは削除になり、再び戻って取られたならば夾雑語——後述——になる）を加えると、「横の流れ」に支配された語句は全体の三六・九%になる。

<図1>

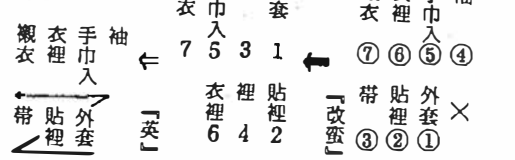
(4丁左)



(2丁右)



(27丁左)



と異なる語の間に挿入される↓ 雑語・挿入語 ○ 配列の順が逆行している↓ 逆行語・反転語 ↓ になる)を加える
と、「横の流れ」に支配された語句は全体の三六・九%になる。

配列が変化した八六六語の中にも能動的な変化(本来の順序を含めたいくつかの可能性のある順序の中から、本来とは異なる取り方をしたもの)と受動的な変化(本来の配列順序とは異なるが、先に取られた語を考えるとその配列順序は必然的だと考えられるもの)がある。前者は五六八語、後者は二九八語であり、配列換えという操作を前者に限って考えるとしても、「横の流れ」はかなり顕著であるといえる。図Ⅰ(d)で示すならば、⑥④⑨⑪⑩が能動的な変化、⑤⑦⑧⑫が受動的な変化である。

さて、図Ⅰの操作を『改竄』全体に施すと図Ⅱ(P.93: 94)のようになる。

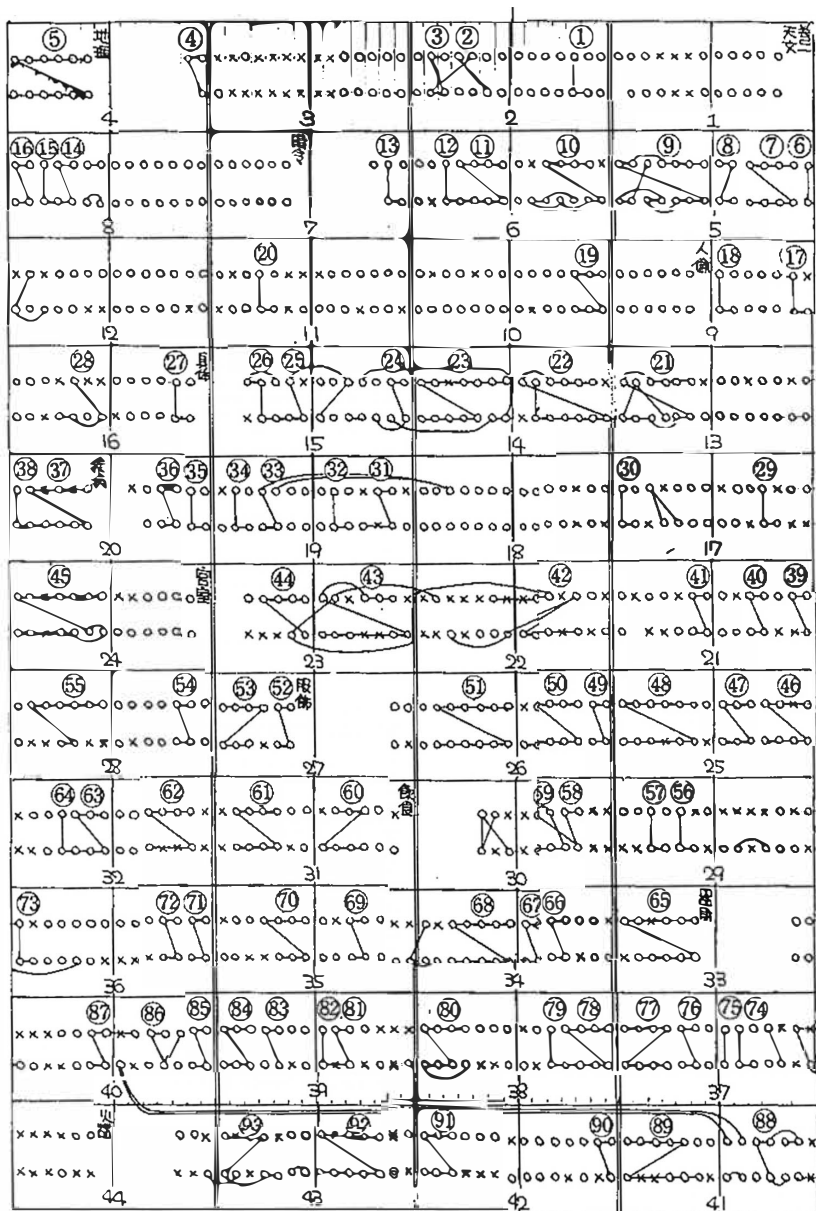
1~71の番号は丁数を示し、①~⑭は類型の整理番号を示す。実線は配列順序に変化の認められるものに附した。○印が『英』に取られた語、×印が削除された語であり、実線中の○印は『英』で増補された語を示す。実線が附されていないところは、本来の順序で取られていることになる。以下、この図を基に配列を見ていくが、その前に確認しておかなければならないのは、このような配列の変化は

「英」独自のものであって「蛭」から「改竄」への改変の際すでに配列に変化(或いは変化の兆)が現われていたのではないということである。表Ⅲ(P.95)を見てほしい。

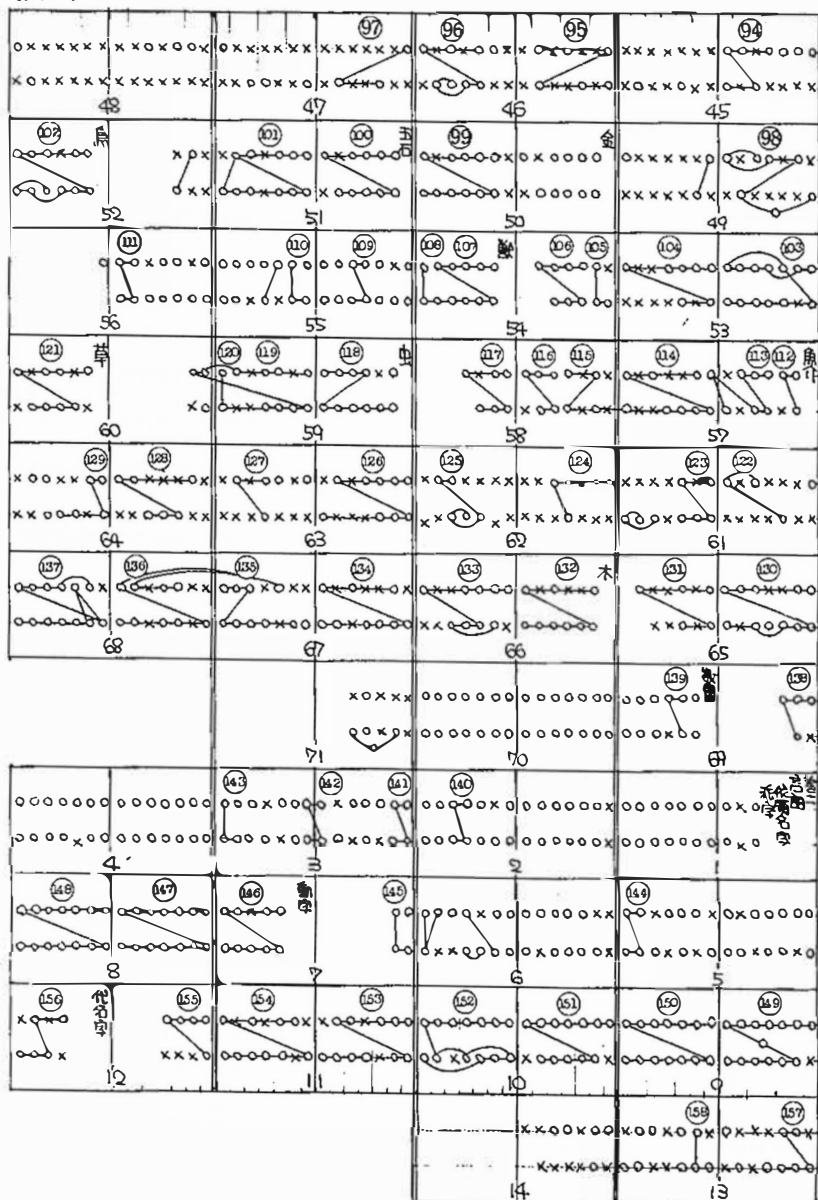
ここに示したように「蛭」と「改竄」との共通部分での語句の移動は低率を示す。表中「人倫」のみが高い移動率を示しているが、これは「300・書売」から「328・菓子師」と、「329・書家」から「356・瓦匠」まで、一丁全体をそのまま入れ換えてあることによる。(おそらく「書売」と「書家」の「書」によって異同が起きたものと考えられる。ここでも「英」の下敷きが「蛭」ではなく「改竄」であるということが確認できる。)さらに「22・霧」と「542・児枕痛」の移動を、「23・蠶」と「543・悪阻」が「改竄」において上下二段抜きで訳語を充てられているために起きたものであるとすれば、計五八語を配列の変化から除外することができ。すると移動した語は一四語、率言えば、一・〇%ときわめて低率となり、この結果、配列の変化は「英」独自のものであると言ってよいだろう。

さて、ここで配列の変化を類型化すると、次の四つに大別できる。

- 上段右↓左↓下段右↓左(図Ⅰ(c))
- 下段右↓左↓上段右↓左(図Ⅰ(e))
- 下段から垂直に上段へ(図Ⅰ(f))



< Ⅱ >



<表Ⅲ>

「蚤」	語数	「改蚤」	語数	増	減	±	共通語数	順	移	移動率%
天文	79	天文	82	7	4	+3	75	73	2	2.6
地理	78	地理	73	3	8	-5	70	70	0	0
時令	53	時令	54	1	0	+1	53	53	0	0
人倫	166	人倫	176	10	0	+10	166	110	56	33.7
身体	109	身体	121	12	0	+12	109	109	0	0
疾病	80	疾病	91	13	2	+11	78	75	3	3.8
宮室	81	宮室	86	6	1	+5	80	80	0	0
服飾	80	服飾	88	9	1	+8	79	75	4	5.3
飲食	50	飲食	58	13	5	+8	45	45	0	0
器財	276	器財	298	39	17	+22	259	256	3	1.2
		火器	151	151	0	+151	0	0	0	0
金	22	金	26	5	1	+4	21	21	0	0
玉石	26	玉石	32	6	0	+6	26	26	0	0
鳥	54	鳥	51	0	3	-3	51	51	0	0
獸	52	獸	55	5	2	+3	50	50	0	0
魚介	51	魚介	47	0	4	-4	47	47	0	0
虫	28	虫	30	3	1	+2	27	27	0	0
草	138	草	149	43	32	+11	106	100	6	5.7
木	82	木	87	13	8	+5	74	74	0	0
数量	49	数量	50	1	0	+1	49	49	0	0
計	1544		1795	339	88	+251	1465	1391	74	5.3

○左から右へ返る。
これらを、その形態からそれぞれ
S型・Z型・L型と呼び四番目を
例外と見る。図Ⅱの整理番号でそ
れぞれの類型を例示すると、

S型Ⅱ ③ ⑤ ⑦ ⑨ ⑩ ⑪ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱

② ②③ ②④ ②⑤ ②⑥ ②⑦ ②⑧ ②⑨ ②⑩ ②⑪ ②⑫ ②⑬ ②⑭ ②⑮ ②⑯ ②⑰ ②⑱

④① ④② ④③ ④④ ④⑤ ④⑥ ④⑦ ④⑧ ④⑨ ④⑩ ④⑪ ④⑫ ④⑬ ④⑭ ④⑮ ④⑯ ④⑰ ④⑱

⑤② ⑤③ ⑤④ ⑤⑤ ⑤⑥ ⑤⑦ ⑤⑧ ⑤⑨ ⑤⑩ ⑤⑪ ⑤⑫ ⑤⑬ ⑤⑭ ⑤⑮ ⑤⑯ ⑤⑰ ⑤⑱

⑥⑦ ⑥⑧ ⑥⑨ ⑥⑩ ⑥⑪ ⑥⑫ ⑥⑬ ⑥⑭ ⑥⑮ ⑥⑯ ⑥⑰ ⑥⑱

⑦① ⑦② ⑦③ ⑦④ ⑦⑤ ⑦⑥ ⑦⑦ ⑦⑧ ⑦⑨ ⑦⑩ ⑦⑪ ⑦⑫ ⑦⑬ ⑦⑭ ⑦⑮ ⑦⑯ ⑦⑰ ⑦⑱

⑧① ⑧② ⑧③ ⑧④ ⑧⑤ ⑧⑥ ⑧⑦ ⑧⑧ ⑧⑨ ⑧⑩ ⑧⑪ ⑧⑫ ⑧⑬ ⑧⑭ ⑧⑮ ⑧⑯ ⑧⑰ ⑧⑱

⑨① ⑨② ⑨③ ⑨④ ⑨⑤ ⑨⑥ ⑨⑦ ⑨⑧ ⑨⑨ ⑨⑩ ⑨⑪ ⑨⑫ ⑨⑬ ⑨⑭ ⑨⑮ ⑨⑯ ⑨⑰ ⑨⑱

⑩① ⑩② ⑩③ ⑩④ ⑩⑤ ⑩⑥ ⑩⑦ ⑩⑧ ⑩⑨ ⑩⑩ ⑩⑪ ⑩⑫ ⑩⑬ ⑩⑭ ⑩⑮ ⑩⑯ ⑩⑰ ⑩⑱

⑪① ⑪② ⑪③ ⑪④ ⑪⑤ ⑪⑥ ⑪⑦ ⑪⑧ ⑪⑨ ⑪⑩ ⑪⑪ ⑪⑫ ⑪⑬ ⑪⑭ ⑪⑮ ⑪⑯ ⑪⑰ ⑪⑱

Z型Ⅱ ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱

①⑧ ①⑨

L型Ⅱ ① ⑬ ⑮ ⑰ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿ ㏀ ㏁ ㏂ ㏃ ㏄ ㏅ ㏆ ㏇ ㏈ ㏉ ㏊ ㏋ ㏌ ㏍ ㏎ ㏏ ㏐ ㏑ ㏒ ㏓ ㏔ ㏕ ㏖ ㏗ ㏘ ㏙ ㏚ ㏛ ㏜ ㏝ ㏞ ㏟ ㏠ ㏡ ㏢ ㏣ ㏤ ㏥ ㏦ ㏧ ㏨ ㏩ ㏪ ㏫ ㏬ ㏭ ㏮ ㏯ ㏰ ㏱ ㏲ ㏳ ㏴ ㏵ ㏶ ㏷ ㏸ ㏹ ㏺ ㏻ ㏼ ㏽ ㏾ ㏿ 㐀 㐁 㐂 㐃 㐄 㐅 㐆 㐇 㐈 㐉 㐊 㐋 㐌 㐍 㐎 㐏 㐐 㐑 㐒 㐓 㐔 㐕 㐖 㐗 㐘 㐙 㐚 㐛 㐜 㐝 㐞 㐟 㐠 㐡 㐢 㐣 㐤 㐥 㐦 㐧 㐨 㐩 㐪 㐫 㐬 㐭 㐮 㐯 㐰 㐱 㐲 㐳 㐴 㐵 㐶 㐷 㐸 㐹 㐺 㐻 㐼 㐽 㐾 㐿 㑀 㑁 㑂 㑃 㑄 㑅 㑆 㑇 㑈 㑉 㑊 㑋 㑌 㑍 㑎 㑏 㑐 㑑 㑒 㑓 㑔 㑕 㑖 㑗 㑘 㑙 㑚 㑛 㑜 㑝 㑞 㑟 㑠 㑡 㑢 㑣 㑤 㑥 㑦 㑧 㑨 㑩 㑪 㑫 㑬 㑭 㑮 㑯 㑰 㑱 㑲 㑳 㑴 㑵 㑶 㑷 㑸 㑹 㑺 㑻 㑼 㑽 㑾 㑿 㒀 㒁 㒂 㒃 㒄 㒅 㒆 㒇 㒈 㒉 㒊 㒋 㒌 㒍 㒎 㒏 㒐 㒑 㒒 㒓 㒔 㒕 㒖 㒗 㒘 㒙 㒚 㒛 㒜 㒝 㒞 㒟 㒠 㒡 㒢 㒣 㒤 㒥 㒦 㒧 㒨 㒩 㒪 㒫 㒬 㒭 㒮 㒯 㒰 㒱 㒲 㒳 㒴 㒵 㒶 㒷 㒸 㒹 㒺 㒻 㒼 㒽 㒾 㒿 㓀 㓁 㓂 㓃 㓄 㓅 㓆 㓇 㓈 㓉 㓊 㓋 㓌 㓍 㓎 㓏 㓐 㓑 㓒 㓓 㓔 㓕 㓖 㓗 㓘 㓙 㓚 㓛 㓜 㓝 㓞 㓟 㓠 㓡 㓢 㓣 㓤 㓥 㓦 㓧 㓨 㓩 㓪 㓫 㓬 㓭 㓮 㓯 㓰 㓱 㓲 㓳 㓴 㓵 㓶 㓷 㓸 㓹 㓺 㓻 㓼 㓽 㓾 㓿 㔀 㔁 㔂 㔃 㔄 㔅 㔆 㔇 㔈 㔉 㔊 㔋 㔌 㔍 㔎 㔏 㔐 㔑 㔒 㔓 㔔 㔕 㔖 㔗 㔘 㔙 㔚 㔛 㔜 㔝 㔞 㔟 㔠 㔡 㔢 㔣 㔤 㔥 㔦 㔧 㔨 㔩 㔪 㔫 㔬 㔭 㔮 㔯 㔰 㔱 㔲 㔳 㔴 㔵 㔶 㔷 㔸 㔹 㔺 㔻 㔼 㔽 㔾 㔿 㕀 㕁 㕂 㕃 㕄 㕅 㕆 㕇 㕈 㕉 㕊 㕋 㕌 㕍 㕎 㕏 㕐 㕑 㕒 㕓 㕔 㕕 㕖 㕗 㕘 㕙 㕚 㕛 㕜 㕝 㕞 㕟 㕠 㕡 㕢 㕣 㕤 㕥 㕦 㕧 㕨 㕩 㕪 㕫 㕬 㕭 㕮 㕯 㕰 㕱 㕲 㕳 㕴 㕵 㕶 㕷 㕸 㕹 㕺 㕻 㕼 㕽 㕾 㕿 㖀 㖁 㖂 㖃 㖄 㖅 㖆 㖇 㖈 㖉 㖊 㖋 㖌 㖍 㖎 㖏 㖐 㖑 㖒 㖓 㖔 㖕 㖖 㖗 㖘 㖙 㖚 㖛 㖜 㖝 㖞 㖟 㖠 㖡 㖢 㖣 㖤 㖥 㖦 㖧 㖨 㖩 㖪 㖫 㖬 㖭 㖮 㖯 㖰 㖱 㖲 㖳 㖴 㖵 㖶 㖷 㖸 㖹 㖺 㖻 㖼 㖽 㖾 㖿 㗀 㗁 㗂 㗃 㗄 㗅 㗆 㗇 㗈 㗉 㗊 㗋 㗌 㗍 㗎 㗏 㗐 㗑 㗒 㗓 㗔 㗕 㗖 㗗 㗘 㗙 㗚 㗛 㗜 㗝 㗞 㗟 㗠 㗡 㗢 㗣 㗤 㗥 㗦 㗧 㗨 㗩 㗪 㗫 㗬 㗭 㗮 㗯 㗰 㗱 㗲 㗳 㗴 㗵 㗶 㗷 㗸 㗹 㗺 㗻 㗼 㗽 㗾 㗿 㘀 㘁 㘂 㘃 㘄 㘅 㘆 㘇 㘈 㘉 㘊 㘋 㘌 㘍 㘎 㘏 㘐 㘑 㘒 㘓 㘔 㘕 㘖 㘗 㘘 㘙 㘚 㘛 㘜 㘝 㘞 㘟 㘠 㘡 㘢 㘣 㘤 㘥 㘦 㘧 㘨 㘩 㘪 㘫 㘬 㘭 㘮 㘯 㘰 㘱 㘲 㘳 㘴 㘵 㘶 㘷 㘸 㘹 㘺 㘻 㘼 㘽 㘾 㘿 㙀 㙁 㙂 㙃 㙄 㙅 㙆 㙇 㙈 㙉 㙊 㙋 㙌 㙍 㙎 㙏 㙐 㙑 㙒 㙓 㙔 㙕 㙖 㙗 㙘 㙙 㙚 㙛 㙜 㙝 㙞 㙟 㙠 㙡 㙢 㙣 㙤 㙥 㙦 㙧 㙨 㙩 㙪 㙫 㙬 㙭 㙮 㙯 㙰 㙱 㙲 㙳 㙴 㙵 㙶 㙷 㙸 㙹 㙺 㙻 㙼 㙽 㙾 㙿 㚀 㚁 㚂 㚃 㚄 㚅 㚆 㚇 㚈 㚉 㚊 㚋 㚌 㚍 㚎 㚏 㚐 㚑 㚒 㚓 㚔 㚕 㚖 㚗 㚘 㚙 㚚 㚛 㚜 㚝 㚞 㚟 㚠 㚡 㚢 㚣 㚤 㚥 㚦 㚧 㚨 㚩 㚪 㚫 㚬 㚭 㚮 㚯 㚰 㚱 㚲 㚳 㚴 㚵 㚶 㚷 㚸 㚹 㚺 㚻 㚼 㚽 㚾 㚿 㜀 㜁 㜂 㜃 㜄 㜅 㜆 㜇 㜈 㜉 㜊 㜋 㜌 㜍 㜎 㜏 㜐 㜑 㜒 㜓 㜔 㜕 㜖 㜗 㜘 㜙 㜚 㜛 㜜 㜝 㜞 㜟 㜠 㜡 㜢 㜣 㜤 㜥 㜦 㜧 㜨 㜩 㜪 㜫 㜬 㜭 㜮 㜯 㜰 㜱 㜲 㜳 㜴 㜵 㜶 㜷 㜸 㜹 㜺 㜻 㜼 㜽 㜾 㜿 㝀 㝁 㝂 㝃 㝄 㝅 㝆 㝇 㝈 㝉 㝊 㝋 㝌 㝍 㝎 㝏 㝐 㝑 㝒 㝓 㝔 㝕 㝖 㝗 㝘 㝙 㝚 㝛 㝜 㝝 㝞 㝟 㝠 㝡 㝢 㝣 㝤 㝥 㝦 㝧 㝨 㝩 㝪 㝫 㝬 㝭 㝮 㝯 㝰 㝱 㝲 㝳 㝴 㝵 㝶 㝷 㝸 㝹 㝺 㝻 㝼 㝽 㝾 㝿 㞀 㞁 㞂 㞃 㞄 㞅 㞆 㞇 㞈 㞉 㞊 㞋 㞌 㞍 㞎 㞏 㞐 㞑 㞒 㞓 㞔 㞕 㞖 㞗 㞘 㞙 㞚 㞛 㞜 㞝 㞞 㞟 㞠 㞡 㞢 㞣 㞤 㞥 㞦 㞧 㞨 㞩 㞪 㞫 㞬 㞭 㞮 㞯 㞰 㞱 㞲 㞳 㞴 㞵 㞶 㞷 㞸 㞹 㞺 㞻 㞼 㞽 㞾 㞿 㟀 㟁 㟂 㟃 㟄 㟅 㟆 㟇 㟈 㟉 㟊 㟋 㟌 㟍 㟎 㟏 㟐 㟑 㟒 㟓 㟔 㟕 㟖 㟗 㟘 㟙 㟚 㟛 㟜 㟝 㟞 㟟 㟠 㟡 㟢 㟣 㟤 㟥 㟦 㟧 㟨 㟩 㟪 㟫 㟬 㟭 㟮 㟯 㟰 㟱 㟲 㟳 㟴 㟵 㟶 㟷 㟸 㟹 㟺 㟻 㟼 㟽 㟾 㟿 㠀 㠁 㠂 㠃 㠄 㠅 㠆 㠇 㠈 㠉 㠊 㠋 㠌 㠍 㠎 㠏 㠐 㠑 㠒 㠓 㠔 㠕 㠖 㠗 㠘 㠙 㠚 㠛 㠜 㠝 㠞 㠟 㠠 㠡 㠢 㠣 㠤 㠥 㠦 㠧 㠨 㠩 㠪 㠫 㠬 㠭 㠮 㠯 㠰 㠱 㠲 㠳 㠴 㠵 㠶 㠷 㠸 㠹 㠺 㠻 㠼 㠽 㠾 㠿 㡀 㡁 㡂 㡃 㡄 㡅 㡆 㡇 㡈 㡉 㡊 㡋 㡌 㡍 㡎 㡏 㡐 㡑 㡒 㡓 㡔 㡕 㡖 㡗 㡘 㡙 㡚 㡛 㡜 㡝 㡞 㡟 㡠 㡡 㡢 㡣 㡤 㡥 㡦 㡧 㡨 㡩 㡪 㡫 㡬 㡭 㡮 㡯 㡰 㡱 㡲 㡳 㡴 㡵 㡶 㡷 㡸 㡹 㡺 㡻 㡼 㡽 㡾 㡿 㢀 㢁 㢂 㢃 㢄 㢅 㢆 㢇 㢈 㢉 㢊 㢋 㢌 㢍 㢎 㢏 㢐 㢑 㢒 㢓 㢔 㢕 㢖 㢗 㢘 㢙 㢚 㢛 㢜 㢝 㢞 㢟 㢠 㢡 㢢 㢣 㢤 㢥 㢦 㢧 㢨 㢩 㢪 㢫 㢬 㢭 㢮 㢯 㢰 㢱 㢲 㢳 㢴 㢵 㢶 㢷 㢸 㢹 㢺 㢻 㢼 㢽 㢾 㢿 㣀 㣁 㣂 㣃 㣄 㣅 㣆 㣇 㣈 㣉 㣊 㣋 㣌 㣍 㣎 㣏 㣐 㣑 㣒 㣓 㣔 㣕 㣖 㣗 㣘 㣙 㣚 㣛 㣜 㣝 㣞 㣟 㣠 㣡 㣢 㣣 㣤 㣥 㣦 㣧 㣨 㣩 㣪 㣫 㣬 㣭 㣮 㣯 㣰 㣱 㣲 㣳 㣴 㣵 㣶 㣷 㣸 㣹 㣺 㣻 㣼 㣽 㣾 㣿 㤀 㤁 㤂 㤃 㤄 㤅 㤆 㤇 㤈 㤉 㤊 㤋 㤌 㤍 㤎 㤏 㤐 㤑 㤒 㤓 㤔 㤕 㤖 㤗 㤘 㤙 㤚 㤛 㤜 㤝 㤞 㤟 㤠 㤡 㤢 㤣 㤤 㤥 㤦 㤧 㤨 㤩 㤪 㤫 㤬 㤭 㤮 㤯 㤰 㤱 㤲 㤳 㤴 㤵 㤶 㤷 㤸 㤹 㤺 㤻 㤼 㤽 㤾 㤿 㥀 㥁 㥂 㥃 㥄 㥅 㥆 㥇 㥈 㥉 㥊 㥋 㥌 㥍 㥎 㥏 㥐 㥑 㥒 㥓 㥔 㥕 㥖 㥗 㥘 㥙 㥚 㥛 㥜 㥝 㥞 㥟 㥠 㥡 㥢 㥣 㥤 㥥 㥦 㥧 㥨 㥩 㥪 㥫 㥬 㥭 㥮 㥯 㥰 㥱 㥲 㥳 㥴 㥵 㥶 㥷 㥸 㥹 㥺 㥻 㥼 㥽 㥾 㥿 㦀 㦁 㦂 㦃 㦄 㦅 㦆 㦇 㦈 㦉 㦊 㦋 㦌 㦍 㦎 㦏 㦐 㦑 㦒 㦓 㦔 㦕 㦖 㦗 㦘 㦙 㦚 㦛 㦜 㦝 㦞 㦟 㦠 㦡 㦢 㦣 㦤 㦥 㦦 㦧 㦨 㦩 㦪 㦫 㦬 㦭 㦮 㦯 㦰 㦱 㦲 㦳 㦴 㦵 㦶 㦷 㦸 㦹 㦺 㦻 㦼 㦽 㦾 㦿 㧀 㧁 㧂 㧃 㧄 㧅 㧆 㧇 㧈 㧉 㧊 㧋 㧌 㧍 㧎 㧏 㧐 㧑 㧒 㧓 㧔 㧕 㧖 㧗 㧘 㧙 㧚 㧛 㧜 㧝 㧞 㧟 㧠 㧡 㧢 㧣 㧤 㧥 㧦 㧧 㧨 㧩 㧪 㧫 㧬 㧭 㧮 㧯 㧰 㧱 㧲 㧳 㧴 㧵 㧶 㧷 㧸 㧹 㧺 㧻 㧼 㧽 㧾 㧿 㨀 㨁 㨂 㨃 㨄 㨅 㨆 㨇 㨈 㨉 㨊 㨋 㨌 㨍 㨎 㨏 㨐 㨑 㨒 㨓 㨔 㨕 㨖 㨗 㨘 㨙 㨚 㨛 㨜 㨝 㨞 㨟 㨠 㨡 㨢 㨣 㨤 㨥 㨦 㨧 㨨 㨩 㨪 㨫 㨬 㨭 㨮 㨯 㨰 㨱 㨲 㨳 㨴 㨵 㨶 㨷 㨸 㨹 㨺 㨻 㨼 㨽 㨾 㨿 㩀 㩁 㩂 㩃 㩄 㩅 㩆 㩇 㩈 㩉 㩊 㩋 㩌 㩍 㩎 㩏 㩐 㩑 㩒 㩓 㩔 㩕 㩖 㩗 㩘 㩙 㩚 㩛 㩜 㩝 㩞 㩟 㩠 㩡 㩢 㩣 㩤 㩥 㩦 㩧 㩨 㩩 㩪 㩫 㩬 㩭 㩮 㩯 㩰 㩱 㩲 㩳 㩴 㩵 㩶 㩷 㩸 㩹 㩺 㩻 㩼 㩽 㩾 㩿 㪀 㪁 㪂 㪃 㪄 㪅 㪆 㪇 㪈 㪉 㪊 㪋 㪌 㪍 㪎 㪏 㪐 㪑 㪒 㪓 㪔 㪕 㪖 㪗 㪘 㪙 㪚 㪛 㪜 㪝 㪞 㪟 㪠 㪡 㪢 㪣 㪤 㪥 㪦 㪧 㪨 㪩 㪪 㪫 㪬 㪭 㪮 㪯 㪰 㪱 㪲 㪳 㪴 㪵 㪶 㪷 㪸 㪹 㪺 㪻 㪼 㪽 㪾 㪿 㫀 㫁 㫂 㫃 㫄 㫅 㫆 㫇 㫈 㫉 㫊 㫋 㫌 㫍 㫎 㫏 㫐 㫑 㫒 㫓 㫔 㫕 㫖 㫗 㫘 㫙 㫚 㫛 㫜 㫝 㫞 㫟 㫠 㫡 㫢 㫣 㫤 㫥 㫦 㫧 㫨 㫩 㫪 㫫 㫬 㫭 㫮 㫯 㫰 㫱 㫲 㫳 㫴 㫵 㫶 㫷 㫸 㫹 㫺 㫻 㫼 㫽 㫾 㫿 㬀 㬁 㬂 㬃 㬄 㬅 㬆 㬇 㬈 㬉 㬊 㬋 㬌 㬍 㬎 㬏 㬐 㬑 㬒 㬓 㬔 㬕 㬖 㬗 㬘 㬙 㬚 㬛 㬜 㬝 㬞 㬟 㬠 㬡 㬢 㬣 㬤 㬥 㬦 㬧 㬨 㬩 㬪 㬫 㬬 㬭 㬮 㬯 㬰 㬱 㬲 㬳 㬴 㬵 㬶 㬷 㬸 㬹 㬺 㬻 㬼 㬽 㬾 㬿 㭀 㭁 㭂 㭃 㭄 㭅 㭆 㭇 㭈 㭉 㭊 㭋 㭌 㭍 㭎 㭏 㭐 㭑 㭒 㭓 㭔 㭕 㭖 㭗 㭘 㭙 㭚 㭛 㭜 㭝 㭞 㭟 㭠 㭡 㭢 㭣 㭤 㭥 㭦 㭧 㭨 㭩 㭪 㭫 㭬 㭭 㭮 㭯 㭰 㭱 㭲 㭳 㭴 㭵 㭶 㭷 㭸 㭹 㭺 㭻 㭼 㭽 㭾 㭿 㮀 㮁 㮂 㮃 㮄 㮅 㮆 㮇 㮈 㮉 㮊 㮋 㮌 㮍 㮎 㮏 㮐 㮑 㮒 㮓 㮔 㮕 㮖 㮗 㮘 㮙 㮚 㮛 㮜 㮝 㮞 㮟 㮠 㮡 㮢 㮣 㮤 㮥 㮦 㮧 㮨 㮩 㮪 㮫 㮬 㮭 㮮 㮯 㮰 㮱 㮲 㮳 㮴 㮵 㮶 㮷 㮸 㮹 㮺 㮻 㮼 㮽 㮾 㮿 㯀 㯁 㯂 㯃 㯄 㯅 㯆 㯇 㯈 㯉 㯊 㯋 㯌 㯍 㯎 㯏 㯐 㯑 㯒 㯓 㯔 㯕 㯖 㯗 㯘 㯙 㯚 㯛 㯜 㯝 㯞 㯟 㯠 㯡 㯢 㯣 㯤 㯥 㯦 㯧 㯨 㯩 㯪 㯫 㯬 㯭 㯮 㯯 㯰 㯱 㯲 㯳 㯴 㯵 㯶 㯷 㯸 㯹 㯺 㯻 㯼 㯽 㯾 㯿 㰀 㰁 㰂 㰃 㰄 㰅 㰆 㰇 㰈 㰉 㰊 㰋 㰌 㰍 㰎 㰏 㰐 㰑 㰒 㰓 㰔 㰕 㰖 㰗 㰘 㰙 㰚 㰛 㰜 㰝 㰞 㰟 㰠 㰡 㰢 㰣 㰤 㰥 㰦 㰧 㰨 㰩 㰪 㰫 㰬 㰭 㰮 㰯 㰰 㰱 㰲 㰳 㰴 㰵 㰶 㰷 㰸 㰹 㰺 㰻 㰼 㰽 㰾 㰿 㱀 㱁 㱂 㱃 㱄 㱅 㱆 㱇 㱈 㱉 㱊 㱋 㱌 㱍 㱎 㱏 㱐 㱑 㱒 㱓 㱔 㱕 㱖 㱗 㱘 㱙 㱚 㱛 㱜 㱝 㱞 㱟 㱠 㱡 㱢 㱣 㱤 㱥 㱦 㱧 㱨 㱩 㱪 㱫 㱬 㱭 㱮 㱯 㱰 㱱 㱲 㱳 㱴 㱵 㱶 㱷 㱸 㱹 㱺 㱻 㱼 㱽 㱾 㱿 㲀 㲁 㲂 㲃 㲄 㲅 㲆 㲇 㲈 㲉 㲊 㲋 㲌 㲍 㲎 㲏 㲐 㲑 㲒 㲓 㲔 㲕 㲖 㲗 㲘 㲙 㲚 㲛 㲜 㲝 㲞 㲟 㲠 㲡 㲢 㲣 㲤 㲥 㲦 㲧 㲨 㲩 㲪 㲫 㲬 㲭 㲮 㲯 㲰 㲱 㲲 㲳 㲴 㲵 㲶 㲷 㲸 㲹 㲺 㲻 㲼 㲽 㲾 㲿 㳀 㳁 㳂 㳃 㳄 㳅 㳆 㳇 㳈 㳉 㳊 㳋 㳌 㳍 㳎 㳏 㳐 㳑 㳒 㳓 㳔 㳕 㳖 㳗 㳘 㳙 㳚 㳛 㳜 㳝 㳞 㳟 㳠 㳡 㳢 㳣 㳤 㳥 㳦 㳧 㳨 㳩 㳪 㳫 㳬 㳭 㳮 㳯 㳰 㳱 㳲 㳳 㳴 㳵 㳶 㳷 㳸 㳹 㳺 㳻 㳼 㳽 㳾 㳿 㴀 㴁 㴂 㴃 㴄 㴅 㴆 㴇 㴈 㴉 㴊 㴋 㴌 㴍 㴎 㴏 㴐 㴑 㴒 㴓 㴔 㴕 㴖 㴗 㴘 㴙 㴚 㴛 㴜 㴝 㴞 㴟 㴠 㴡 㴢 㴣 㴤 㴥 㴦 㴧 㴨 㴩 㴪 㴫 㴬 㴭 㴮 㴯 㴰 㴱 㴲 㴳 㴴 㴵 㴶 㴷 㴸 㴹 㴺 㴻 㴼 㴽 㴾 㴿 㵀 㵁 㵂 㵃 㵄 㵅 㵆 㵇 㵈 㵉 㵊 㵋 㵌 㵍 㵎 㵏 㵐 㵑 㵒 㵓 㵔 㵕 㵖 㵗 㵘 㵙 㵚 㵛 㵜 㵝 㵞 㵟 㵠 㵡 㵢 㵣 㵤 㵥 㵦 㵧 㵨 㵩 㵪 㵫 㵬 㵭 㵮 㵯 㵰 㵱 㵲 㵳 㵴 㵵 㵶 㵷 㵸 㵹 㵺 㵻 㵼 㵽 㵾 㵿 㶀 㶁 㶂 㶃 㶄 㶅 㶆 㶇 㶈 㶉 㶊 㶋 㶌 㶍 㶎 㶏 㶐 㶑 㶒 㶓 㶔 㶕 㶖 㶗 㶘 㶙 㶚 㶛 㶜 㶝 㶞 㶟 㶠 㶡 㶢 㶣 㶤 㶥 㶦 㶧 㶨 㶩 㶪 㶫 㶬 㶭 㶮 㶯 㶰 㶱 㶲 㶳 㶴 㶵 㶶 㶷 㶸 㶹 㶺 㶻 㶼 㶽 㶾 㶿 㷀 㷁 㷂 㷃 㷄 㷅 㷆 㷇 㷈 㷉 㷊 㷋 㷌 㷍 㷎 㷏 㷐 㷑 㷒 㷓 㷔 㷕 㷖 㷗 㷘 㷙 㷚 㷛 㷜 㷝 㷞 㷟 㷠 㷡 㷢 㷣 㷤 㷥 㷦 㷧 㷨 㷩 㷪 㷫 㷬 㷭 㷮 㷯 㷰 㷱 㷲 㷳 㷴 㷵 㷶 㷷 㷸 㷹 㷺 㷻 㷼 㷽 㷾 㷿 㸀 㸁 㸂 㸃 㸄 㸅 㸆 㸇 㸈 㸉 㸊 㸋 㸌 㸍 㸎 㸏 㸐 㸑 㸒 㸓 㸔 㸕 㸖 㸗 㸘 㸙 㸚 㸛 㸜 㸝 㸞 㸟 㸠 㸡 㸢 㸣 㸤 㸥 㸦 㸧 㸨 㸩 㸪 㸫 㸬 㸭 㸮 㸯 㸰 㸱 㸲 㸳 㸴 㸵 㸶 㸷 㸸 㸹 㸺 㸻 㸼 㸽 㸾 㸿 㹀 㹁 㹂 㹃 㹄 㹅 㹆 㹇 㹈 㹉 㹊 㹋 㹌 㹍 㹎 㹏 㹐 㹑 㹒 㹓 㹔 㹕 㹖 㹗 㹘 㹙 㹚 㹛 㹜 㹝 㹞 㹟 㹠 㹡 㹢 㹣 㹤 㹥 㹦 㹧 㹨 㹩 㹪 㹫 㹬 㹭 㹮 㹯 㹰 㹱 㹲 㹳 㹴 㹵 㹶 㹷 㹸 㹹 㹺 㹻 㹼 㹽 㹿 㺀 㺁 㺂 㺃 㺄 㺅 㺆 㺇 㺈 㺉 㺊 㺋 㺌 㺍 㺎 㺏 㺐 㺑 㺒 㺓 㺔 㺕 㺖 㺗 㺘 㺙 㺚 㺛 㺜 㺝 㺞 㺟 㺠 㺡 㺢 㺣 㺤 㺥 㺦 㺧 㺨 㺩 㺪 㺫 㺬 㺭 㺮 㺯 㺰 㺱 㺲 㺳 㺴 㺵 㺶 㺷 㺸 㺹 㺺 㺻 㺼 㺽 㺾 㺿 㻀 㻁 㻂 㻃 㻄 㻅 㻆 㻇 㻈 㻉 㻊 㻋 㻌 㻍 㻎 㻏 㻐 㻑 㻒 㻓 㻔 㻕 㻖 㻗 㻘 㻙 㻚 㻛 㻜 㻝 㻞 㻟 㻠 㻡 㻢 㻣 㻤 㻥 㻦 㻧 㻨 㻩 㻪 㻫 㻬 㻭 㻮 㻯 㻰 㻱 㻲 㻳 㻴 㻵 㻶 㻷 㻸 㻹 㻺 㻻 㻼 㻽 㻾 㻿 㼀 㼁 㼂 㼃 㼄 㼅 㼆 㼇 㼈 㼉 㼊 㼋 㼌 㼍 㼎 㼏 㼐 㼑 㼒 㼓 㼔 㼕 㼖 㼗 㼘 㼙 㼚 㼛 㼜 㼝 㼞 㼟 㼠 㼡 㼢 㼣 㼤 㼥 㼦 㼧 㼨 㼩 㼪 㼫 㼬 㼭 㼮 㼯 㼰 㼱 㼲 㼳 㼴 㼵 㼶 㼷 㼸 㼹 㼺 㼻 㼼 㼽 㼾 㼿 㽀 㽁 㽂 㽃 㽄 㽅 㽆 㽇 㽈 㽉 㽊 㽋 㽌 㽍 㽎 㽏 㽐 㽑 㽒 㽓 㽔 㽕 㽖 㽗 㽘 㽙 㽚 㽛 㽜 㽝 㽞 㽟 㽠 㽡 㽢 㽣 㽤 㽥 㽦 㽧 㽨 㽩 㽪 㽫 㽬 㽭 㽮 㽯 㽰 㽱 㽲 㽳 㽴 㽵 㽶 㽷 㽸 㽹 㽺 㽻 㽼 㽽 㽾 㽿 㿀 㿁 㿂 㿃 㿄 㿅 㿆 㿇 㿈 㿉 㿊 㿋 㿌 㿍 㿎 㿏 㿐 㿑 㿒 㿓 㿔 㿕 㿖 㿗 㿘 㿙 㿚 㿛 㿜 㿝 㿞 㿟 㿠 㿡 㿢 㿣 㿤 㿥 㿦 㿧 㿨 㿩 㿪 㿫 㿬 㿭 㿮 㿯 㿰 㿱 㿲 㿳 㿴 㿵 㿶 㿷 㿸 㿹 㿺 㿻 㿼 㿽 㿾 㿿 㸀 㸁 㸂 㸃 㸄 㸅 㸆 㸇 㸈 㸉 㸊 㸋 㸌 㸍 㸎 㸏 㸐 㸑 㸒 㸓 㸔 㸕 㸖 㸗 㸘 㸙 㸚 㸛 㸜 㸝 㸞 㸟 㸠 㸡 㸢 㸣 㸤 㸥 㸦 㸧 㸨 㸩 㸪 㸫 㸬

七語Ⅱ一例、六語Ⅱ五例、四語Ⅱ六例、三語Ⅱ一例、二語Ⅱ二例、一語Ⅱ二六例)の内、類型(横の流れ)と全く関係のない「夾雑語」は一例も見られないことから、同様のことが言える。つまり、横の流れの中では、削除するか取るかという判断が、かなり曖昧なもの(もし最初から取捨を明確に決定しておいたならば、これほど多くの語を思い出したように取るというようなことはないだろう)であったことを意味する。またS型・Z型の二頂点を結ぶ(図Ⅰで示せば(a)の⑥→⑦、(f)の③→④)移動やL型の下から上への移動も「前に戻る」という意味では「夾雑語」の一例であると言えよう。

以上見たように、例外をも含めたすべての配列の変化は、『改竄』の語句を右から左へ取るという「横の流れ」によって生じたと言うことができる。

四、語群の解体

では、逆に移動しない語句があるのは何故であろうか。それは、『改竄』(当然『竄』『英』も)が意義分類を用いて語彙を所収してあるため、一定の規則で結びついた「語群」が形成されているからである。ここで再び表Ⅱを見ると、部門によって移動率に大きな開きがあることが認

められる。それは、同系統の語句は配列を変えないという語群に対する編者の意識を示すものである。ところがその意識・判断は明確ではなく、例えば『改竄』では「110・橋」「111・舟橋」「112・石橋」「113・木橋」「114・翻橋」と、明らかに語群を形づくっていた語彙が、『英』になると「86・舟橋」「87・木橋」「88・井」「89・泉源」「90・山」「91・橋」「92・石橋」「93・翻橋」というように分裂解体している例が多く見られる。即ち前節で見た「横の流れ」Ⅱ「配列の原理」が「語群」を解体したわけであるこの「配列の原理」と「語群」という、異なる方向性を持った語彙の結びつきを対照することによって『英』の編者石橋政方の編纂意識を導き出すのが本節の目的である。そこでまず、『改竄』で形成されている語群を次の三種に分類する。

α 抱括

先の「橋」の例のように、最初に大きな概念を表わす語、統けていくつかの具体的な語を示した語群。

β 対応

「東」「西」「南」「北」や「夜」「昼」のように、それぞれの語が互に対立・同義などの、ある約束で結びついている語群。もし「方位」「東」「西」「南」「北」と記されていればαに含まれる。また『改竄』で「192・

昨日」―「193・再昨」、「194・明日」―「195・明外日」と対応していた語群が、『英』では「165・昨日」―「166・明日」、「167・再昨」―「168・明外日」とされた場合、配列は異なるが別の意味で対応しているので、このような例は語群の解体とは判断しない。

γ 関連

直接の対応語ではないが、「雷」「雹」や「火」「炎」「烟」のように深い関連をもつ語群。抑々、部門全体がひとつの関連語群であり、関連しているか否かという判断も絶対的ではないが、このような結びつきをしている語群を無視するわけにはいかないので、語群の一種として掲げる。

これらをまとめたものが表Ⅳである。

語群αに附した()は、αに含まれるβの語数である。また語群内での移動、例えば「268・医者」「269・内科」「270・外科」「271・眼科」「272・牙医」↓「232・医者」「233・内科」「234・眼科」「235・外科」「236・牙医」のような例は語群の解体とは見ない。しかし、「487・脈」「488・静脈」「489・動脈」↓「418・静脈」「419・脈」「420・動脈」のような例は語群内での移動ではあるが、語の相關関係を考え、これを解体とする。

表Ⅳより、語群α・βについては、『英』の編者はかな

り意識していたことが明らかである。特に「166・正月」「167・二月」「168・三月」「169・四月」「170・五月」「171・六月」「172・七月」「173・八月」「174・九月」「175・十月」「176・十一月」「177・十二月」や「200・日曜」「201・月曜」「202・火曜」「203・水曜」「204・木曜」「205・金曜」「206・土曜」のように語群内での移動も不可能である六二語については解体率は0%である。さらに、語群(すべてβ)を全く無視して配列されている「動字」部門を除けばβの解体率は七・〇%となる。これに対してγの解体率は六一・六%と高い。つまり誰の目にも明らかな語群以外について編者は殆んど注意を払っていない(「配列原理」が「語群意識」を凌駕している)と言える。

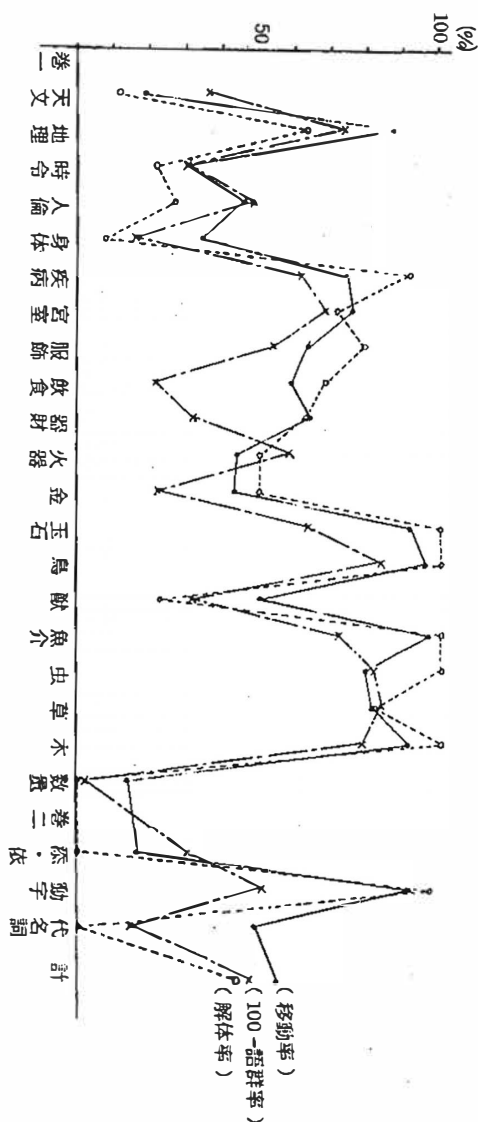
このように語群に着目すると、石橋政方による配列の組み換えは、全く無造作に行なわれたのではなく、意識的であったことが証明できる。同時に、語群意識によって配列に変化が見られない語彙を確認することで、変化した配列の意味がさらに明確になる。その上で、表Ⅲの「語群率」「解体率」と表Ⅱの「移動率」とを重ね合わせることによって以下の事実がわかる。

○五八・六%という高い移動率にも拘わらず、誰の目にも明らかな語群(α+β)の解体率は一八・三%と低い。因みに、移動しない語彙六七六語のうちα+βは

	語 群 数			計	共通語数	語 率 (%)		解 体	数	計	解 体 率 (%)		計 (%)		
	α	β	γ			$\alpha+\beta$	$\alpha+\beta+\gamma$				α	β		γ	
天文	5-22(8)	5-12	3-10	36	58	44.4	62.1	0	1-2	1-2	4	0	16.7	20.0	11.1
地理	1-5	2-4	4-10	19	70	12.9	27.1	1-5	0	3-7	12	100.0	0	70.0	63.2
時令	2-12(2)	7-27	—	37	53	69.8	69.8	1-8	0	—	8	66.7	0	—	21.6
人倫	1-5	23-46	8-27	78	152	33.6	51.3	1-5	0	4-16	21	100.0	0	59.3	26.9
身体	3-13	4-8	13-64	85	101	20.8	84.2	1-3	0	1-4	7	23.1	0	6.3	8.2
疾病	1-2	1-2	6-20	24	62	6.5	38.7	0	1-2	6-20	22	0	100.0	100.0	91.7
宮室	1-4	—	7-20	24	77	5.2	31.2	1-4	—	5-13	17	100.0	—	65.0	70.8
服飾	1-2	—	2-27	29	63	3.2	46.0	0	—	1-23	23	0	—	85.2	79.3
飲食	3-14(2)	5-17	3-6	35	46	63.0	76.1	2-12(2)	3-12	0	24	85.7	70.6	0	68.6
器財	2-5	3-6	41-153	165	240	5.0	68.8	0	1-2	26-102	104	0	33.3	66.7	63.0
火器	—	—	8-20	20	48	0	41.7	—	—	4-10	10	—	—	50.0	50.0
金	—	2-4	4-12	16	21	19.0	76.2	—	2-4	2-4	8	—	100.0	33.3	50.0
玉石	—	—	3-8	8	23	0	34.8	—	—	3-8	8	—	—	100.0	100.0
鳥	1-4(2)	1-2	1-2	6	41	9.8	14.6	1-4(2)	1-2	1-2	6	100.0	100.0	100.0	100.0
獸	6-22(2)	1-2	4-13	35	50	54.0	70.0	1-5	0	1-3	8	22.7	0	23.1	22.9
魚介	—	—	4-9	9	33	0	27.3	—	—	4-9	9	—	—	100.0	100.0
虫	2-4	—	—	4	24	0	16.7	2-4	—	—	4	100.0	—	—	100.0
草	—	—	4-11	11	74	0	14.9	—	—	3-9	9	—	—	81.8	81.8
木	—	—	4-13	13	63	0	20.6	—	—	4-13	13	—	—	100.0	100.0
数量	1-4	1-33	1-4	41	42	88.1	97.6	0	0	0	0	0	0	0	0
系・依	—	45-94	—	94	139	0	67.7	—	0	—	0	—	0	—	0
動字	—	25-56	—	56	115	0	48.7	—	24-54	—	54	—	96.4	—	96.4
代名字	—	6-22	—	22	27	0	81.5	—	0	—	0	—	0	—	0
計	32-125(9)	134-344	111-398	851	1620	27.0	52.0	11-40(4)	33-78	69-245	371	32.0	22.7	61.6	43.6

△ 概 △

<グラフィ>



○ 三三四語 (三四・六%) である。

○ 部門別の語群率・解体率・移動率には関連性が見られる。(グラフィ参照、語群率と解体率・移動率は対立的に関連するため語群率は「100マイナス語群率」というかたちをとって示した。)

○ このことは語群より先に「部門」に対する意識(先入

見のようなもの)が編者にあったことを示している。

つまり配列換えを行なう部門では語群への注意が低下し、「横の流れ」に乗って勢いついた形で語句の移動を徹底させ、逆に配列換えを行なわない部門では語群を形成していない語句でも移動させないで、「改竄」の順序を守る傾向がある。

五、おわりに

以上見てきたように、『英』における配列の動的部分「移動した語彙（解体した語群）」Ⅱ「移動させても構わない語彙（解体させても構わない語群或いは語群を形成しない語彙）」と表裏一体の形で、「移動しなかった語彙（解体しなかった語群）」Ⅲ「移動させてはならない語彙（解体させてはならない語群）」という静的部分の定理が成り立つ。

では何故、石橋政方は移動させても構わない語彙を、自らの判断で可能な限りそれも規則的（容易）な方法で移動させたのであろうか。もし配列の変化によって新しい意味が生み出されるのであれば、換言すると「配列を変えること」が「手段」であるのならば、この疑問を解く（「目的」を見出す）ことは比較的容易である。しかしこの場合、「配列を変えること」自体が「手段」であると同時に「目的」であるのだから、その「目的」を見出すことは容易ではない。

しかし、以上の考察の結果に、編者が「自叙」（注5参照）に「森島氏」とまで書き加えた『壺』ではなく、どこにも一言も触れられていない『改壺』が底本であったこと、さらに『壺』『改壺』『英』を比較して（表1参照）明らかにように、もし『壺』が底本であれば『英』は『壺』に

対して「改正増補」の位置を占める（事実上逆）ことができるという三書の間関係を考え併せれば、

- (1) 辞書を編んだ事実を自分自身或いは他者に納得させたい。
- (2) そのためには出来るだけ手が加えられていて、新しく、独自のものであることが望ましい。
- (3) 即ち底本は『改壺』であるより『壺』であったほうが都合が良い。

(4) 従って、底本が『改壺』であることを隠蔽する必要があり、配列を変えれば同時に「独自のもの」に近づく。

という意識により、先行辞書に対して内容の変化を持たせようとした工夫が、右から左へという「配列の原理」となって現われたものであると考えられる。

その結果「一匁」を欠いて「十匁」を取ったり、「静脈」「脈」「動脈」のような奇妙な配列が行なわれたり、さらには「四支」と「手」や「足」の間に「肛門」が入りこむなどといった勇み足を随所で犯すような結果になったのであろう。

※本稿では、（表記を重視する論ではないため）旧字体は新字体に改めて記した。また、改正増補壺語箋

の異本、さらには改正増補英語箋との比較検討については、今後の課題としたい。

(注)

1. 「民間では、会話書が出版され(中略)『増訂華英通語(万延元)』、石橋政方の『英語箋』(万延二)、清水卯三郎の『えんぎりしことば』(万延元)が広く迎えられた。」(『国語学研究事典』)
2. 一例として、『英』より六年後の一九六七(慶応三)年には、『二万語以上の日本語』(英文によるはしき語の訳)を採録した『和英語林集成』が出版されている。
3. 後編四冊が出版されたのは一八六三(文久三)年。
4. 村上編『英語箋』は、序文・発音の説明とともに英語で記され、この時期の外国語導入に多大な功績があった彼の語学力をよく示している、英語主体の辭書である(仮名だけでは区別し難い語にのみ漢字が附されている)。これに対して石橋編『英語箋』の語彙は殆んどが漢字表記であり、原則として英語一語を対応させている。
5. 「^ニ首^ヲ得^ル森島氏ノ^ニ蜜語箋一本^ヲ。看^テ其ノ^ニ彙輯^一ヲ知^ル天文地理時令物名人事套語^ヲ。」(返り点・送り仮名は筆者)
6. 特に「蜜」の「言語」「万国地名箋」「改蜜」巻二、『英』巻二にその差異が顕著であり、『改蜜』は「改正増補」の体裁をとりながら、独自の形で内容を豊かなものにしていく(多くの学問に造詣の深かった箕作阮甫ならではの観がある)。ところが『英』は「改蜜」を踏襲しようとしながら(英語と蘭語の違いはあるものの)貧しい内容しか示し得ていない。「處前字」「接統字」「嗟歎字」等がそのまま抜けていることや、「会話」が殆んど三語程度から成るものであることは、初心者に対する配慮というよりは、投げやりなものを感じさせる。
7. 逆にその規則性は、『改蜜』と『英』との結びつきを証明するものでもある。「蜜」と『英』の間にはこのような規則性は見られない。
8. 「蜜」の中には¹³²⁹・赤石脂のように、蘭語の訳を欠くものが八例、¹⁵⁰⁹・蜈蚣のように蘭語訳を黒く塗り潰し消去してあるものが三例見られるが、これらも配列の上では一語として考える。これら一例のうち『改蜜』で蘭語訳を加えてあるものは八語、削除された語が三語である。

(岡山大学大学院文学研究科)